

「イエシュアを捕えよ」

マルコの福音書 14:43～52

はじめに

ゲツセマネの園にいたイエシュアと弟子たちのもとに、イエシュアを捕えようと、イスカリオテのユダに率いられた群衆が迫ります。彼らの手には武器が握られており、目に見える状況としては最低最悪と言える、そんな様子が記されているのが今日の箇所です。これをただの悲劇として受け取ることもできますが、ここにも確かに神のご計画が表されているのです。ですから今日も一緒に、目に見えるものではなく、隠された目に見えないものに目を留めてまいりましょう。

1. 剣と棒

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二人の一人のユダが現れた。祭司長たち、律法学者たち、長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした群衆も一緒であった。

イスカリオテのユダが「剣や棒」を持った人々を連れてやって来ました。イエシュアを捕らえる際に、弟子たちやイエシュア本人に抵抗されることを想定してのことだと思われそうですが、ヘブル語の視点で見ると、この事実にもやはり神のご計画が表されていることがわかります。

まず「剣」について。これはヘレヴ(כֶּלֶבֶת)といい、本来は人の持つそれではなく、神の剣を指す言葉でした。

創世記【新改訳 2017】

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

これはアダムとエバがエデンの園を追放された時の記述です。ここに聖書で最初の「剣」ヘレヴがあります。このヘレヴは「輪を描いて回る」ということですが、ここに使われているハーファク(הֲפִיךָ)という言葉は単にくるくる回るという意味ではなく「反転、逆転する、覆す、戻す」という意味の言葉です。つまり神は人をエデンの園から追放したその時点で、再び人を園にハーファクすなわち戻す、帰らせるご計画があることをここに表しておられるのです。具体的には「炎の剣」ともあるように、大きな痛みと苦しみを経て、人はエデンの園に帰ります。それはすなわち、終わりの日の大きな患難の中で目が開かれ、イエシュアをメシアとして呼び求めるようになるユダヤ人たち、まさにその思い、考えがハーファク、覆させられ、神に立ち戻る彼らの姿がこの言葉には表されているのです。

そして「棒」マツケール(מַטְּקָא)というこの言葉の最初の言及は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

30:37 ヤコブは、ポプラや、アーモンドや、すずかけの木の**若枝**を取り、それらの白い筋の皮を剥いで、**若枝**の白いところをむき出しにし、

30:38 皮を剥いだ**枝**を、群れが水を飲みに来る水溜めの水ぶねの中に、群れと差し向かいに置いた。それで群れのやぎたちは、水を飲みに来たとき、さかりがついた。

30:39 こうして羊ややぎは**枝**の前で交尾し、縞毛、ぶち毛、斑毛のものを産んだ。

30:43 このようにして、この人は大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、それにらくだとろばを持つようになった。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが「大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、それにらくだとろばを持つようになった」という出来事を記したのですが、そのために用いられたのが「**若枝、枝**」と訳されている、聖書で最初のマツケールなのです。すなわちマツケールとは本来、イスラエルを大いに祝福するための存在を指し示すものであると言えます。そしてそれは「白いところをむき出し」にされたもの、「白い」ものとされた、白くされたものであると記されています。ヨハネの黙示録にこう預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の**枝**を持っていた。

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この**白い衣**を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそご存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で**白くした**のです。

このように、ここには「白い衣を身にまとい」、さらに「**枝**」を持つという、マツケール本来の意味を表すような存在が記されており、それは「子羊」の血によってきよくされ、その御前に立つ「すべての国民、部族、民族、言語から」選ばれた「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」であると記されています。これはすなわちイエシュアを信じる異邦人の教会です。つまり「**棒**」マツケールにはイスラエルを祝福し、これにつながる私たち教会の存在が、そして「**剣**」ヘレヴにはイエシュアをメシアとして受け入れるように変えられるユダヤ人、イスラエルの残りの民の姿が指し示されているのです。ですから、イエシュアのもとに「**剣や棒を手にした群衆**」がやって来たというこの出来事には、**終わりの日に、地上再臨されるイエシュアのみもとにイスラエルの残りの者たちと、そして私たち教会の聖徒たちが集められて建てられる「神の国」およびその国民の姿が「型、たとえ」として表されているのです**。このように、目に見える状況からはまったく想像もできないような光景が、神のご計画が、ヘブル語の視点で見ると見えてくるのです。

2. 口づけ

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:44 イエスを裏切ろうとしていた者は、彼らと合図を決め、「私が口づけをするのが、その人だ。その人を捕まえて、しっかりと引いて行くのだ」と言っておいた。

14:45 ユダはやって来るとすぐ、イエスに近づき、「先生」と言って口づけした。

14:46 人々は、イエスに手をかけて捕らえた。

なぜユダは「口づけ」を合図としたのでしょうか。ここに使われているナーシャク(אֲשַׁק)の最初の言及は以下の箇所です。

創世記【新改訳 2017】

27:24 「本当におまえは、わが子エサウだね」と言った。するとヤコブは答えた。「そうです。」

27:26 父イサクはヤコブに、「近寄って私に口づけしてくれ、わが子よ」と言ったので、

27:27 ヤコブは近づいて、彼に口づけした。イサクはヤコブの衣の香りを嗅ぎ、彼を祝福して言った。「ああ、わが子の香り。【主】が祝福された野の香りのようだ。

27:28 神がおまえに天の露と地の肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒を与えてくださるよう。

27:29 諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように。おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように。おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように…

27:34 エサウは父のことばを聞くと、声の限りに激しく泣き叫び、父に言った。「お父さん、私を祝福してください。私も。」

27:35 父は言った。「おまえの弟が来て、だましたのだ。そしておまえへの祝福を奪い取ってしまった。」

これはアブラハムの子イサクが、その長子であるエサウを祝福しようとした場面です。しかし実際には弟のヤコブがその祝福を奪ってしまいます。イサクが老齢で目が悪くなっていたことにつけこみ、またエサウの衣までも奪い、ヤコブは兄を出し抜き、そして父イサクを見事に騙し、その祝福を横取りしました。ここに聖書で最初のナーシャク「口づけ」が使われており、このようにナーシャクとは本来、偽り、騙し、欺いて祝福を奪う、という意味があるのです。これを行う究極的存在が、偽りの父とも呼ばれる悪魔、サタンとその息子、獣と呼ばれる反キリストです。彼は自分こそが神、またメシアだと偽ってユダヤ人をはじめすべての人々を騙し、そしてこの地上の支配者としてのその栄光を手にし、君臨するのです(ヨハネ黙示録 13:7)。

3. 捕らえる

そしてこの獣が行う最も重大な悪行が次の「人々は、イエスに手をかけて捕らえた」という記述には表されています。ここで「捕らえた」と訳されているターファス(אֶשְׂפַת)は本来、「楽器を奏でる者(創世記 4:21)」という意味で、その先祖、創始者であるユバルという一人の男を指し示しています。彼の名にはなんと「神殿から運び出す(エズラ記 5:14)」という意味があるのです。神殿から器などの祭具を運び出すということは、神への礼拝をやめさせる、神のさだめ、掟に背かせる、神に逆らわせるということです。

「**口づけ**」ナーシャクに指し示された、反キリストが奪うもの、その最大のものがやがてエルサレムに三度（みたび）建てられる神殿です。ダニエル書にこう預言されています。

ダニエル書

9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、**いけにえとささげ物をやめさせる**。忌まわしいものの翼の上に、**荒らす者が現れる**。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」

「**忌まわしいものの翼**」とは「**荒らす者**」獣、反キリストを礼拝することによって汚れた、背教した神殿を表しており、このような悲劇がやがて起こることが、イエシュアが捕らえられた出来事には「型」として表されているのです。しかしそれは「半週の間」とあるように、あくまでも一時的な、ごく短い期間の出来事であり、やがて「ついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる」のです。

4. 耳を切り落とす

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:47 そのとき、そばに立っていた一人が、剣を抜いて大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落とした。

ここでなぜ大祭司のしもべの「**耳**」が切り落とされたのでしょうか。偶然でしょうか、いいえ、そうではありません。この「**耳**」を意味するオーゼン(אָזן)とは本来、神の御言葉を聞くためのそれではなく、自分を王とする、自分を神とする横暴で傲慢な一人の人の言葉に「**耳**」を傾ける、聞き従うことを意味するものでした。

創世記【新改訳 2017】

4:23 レメクは妻たちに言った。「アダとツィラよ、私の声を聞け。レメクの妻たちよ、私の言うことに**耳を傾けよ**。私は一人の男を、私が受ける傷のために殺す。一人の子どもを、私が受ける打ち傷のために。」
4:24 カインに七倍の復讐があるなら、レメクには七十七倍。」

これはアダムの子カインの子孫レメクの言葉です。「**カインに七倍の復讐がある**」というのは、カインが殺されることがないように神が定められた、神の御言葉でしたが、レメクは「**レメクには七十七倍**」と言って神の御言葉に上書きをし、神の御言葉よりも自分の方が上であると言い表し、自分こそが王、自分こそが神であるかのように主張したのです。ですからこのレメクもまた反キリストの「型」であり、オーゼンとは本来、そのような者に聞き従うこと、つまり反キリストに従い、神に逆らうことを意味する言葉なのです。

そしてそれは先に述べた「**剣**」ヘレヴによって切り落とされました。これはやがてイスラエルの民の中から、神に聞き従わない心を取り除かれるということを表しており、つまり「**そのとき、そばに立っていた一人が、剣を抜いて…**」とは、やがて再臨されるイエシュアの「型」です。イエシュアの地上再臨によ

って、イスラエルの残りの者が神に立ち返り、神にのみ聞き従う、神の所有の民として回復されるのです。そしてそれがどのようなものであるかが次に示されています。

5. 毎日、宮で一緒に

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:48 イエスは彼らに向かって言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。」

14:49 わたしは毎日、宮であなたがたと一緒にいて教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえませんでした。しかし、こうなったのは聖書が成就するためです。」

ここでイエシュアが語っておられるように、「わたしは毎日、宮であなたがたと一緒にいて教え」るようになること、それが神のご計画の完成、また目的であることが、ここには示されているのです。神のご計画は反キリストを滅ぼし、地上の悪を一掃することだけではありません。このように、イエシュアが「毎日」すなわちいつも、いつまでも「一緒にいて」イスラエルの民とともにおられ、「宮で」すなわちエルサレムから世界を治め、導いてくださるようになることこそがその目的なのです。そして「はや二度とイエシュアに逆らい、これを「捕らえ」、取り除こう、逆らおうとするようなことが起こらない」ということもここには言い表されているのです。それこそが「聖書が成就する」すなわち聖書に記された神のご計画が実現するということであることが、ここには指し示されているのです。

6. 捨てて逃げる

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:50 皆は、イエスを見捨てて逃げてしまった。

14:51 ある青年が、からだに亜麻布を一枚まとっただけでイエスについて行ったところ、人々が彼を捕らえようとした。

14:52 すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、裸で逃げた。

弟子たちがイエシュアを「見捨てて逃げ」た、またある青年が亜麻布を「脱ぎ捨てて、裸で逃げた」という行為が並行して、パラレルリズムで記されています。つまりこの二つの出来事は同じ内容を指し示して強調しているということです。ここに使われている「捨てる」という意味のアーザヴ(אִצָּב)は本来このように用いられました。

創世記【新改訳 2017】

2:24 それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。

2:25 そのとき、人とその妻はふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。

このように「離れ(る)」と訳された本来のアーザヴは「妻と結ばれ…一体となる」ことを指し示す言葉なのです。使徒パウロはこれをイエシュアと教会の「型」を表す、偉大な奥義であると述べています(エペソ人への手紙 5:32)。

そして「逃げる」という意味のヌース(נוס)は本来の意味もほぼ同じですが、それは大きな脅威、戦いから「隠れる、隠される」こと、そして「生き残る」ことを意味しています(創世記 14:10)。このようにイエシュアと教会が結ばれ、地上から隠される、そして生き残ること、それはイエシュアの空中再臨による教会の携挙を表した「型」であると言えます。その事実が、神のご計画がこの時の弟子たち、そしてある青年についての記述には表されているのです。ちなみにこの青年が「裸で」逃げたという記述も「人とその妻はふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」という記述と見事に結びついているのです。

7. 変貌

このように、イスカリオテのユダの裏切り、つまりそれまでイエシュアの弟子であった彼がイエシュアの敵として変貌することによって、それまで膠着状態だったユダヤ人指導者たちとイエシュアとの敵対関係も、そしてイエシュアと弟子たちの状況も、あつという間に激変してしまいました。それまであたりまえのようにともに旅をし、あたりまえのように持たれていたイエシュアと弟子たちの交わりの日々が、このユダというたった一人の人が変貌することによって、すべてが大きく変わってしまったのです。しかしこれはあくまでも「型」です。これと同じことが、やがて終わりの日に起こるということの予表です。ユダの中に表された反キリスト、彼は最初は獣のようではなく、平和の使者のような姿で現れ、後にその本性を表します。先に取り上げたダニエル書 9:27 の預言「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる」にあるとおり、一週の間、堅い約束をその半分の期間で破棄し、裏切るのです。彼のその裏切り、変貌によってイスラエルと、そして私たち教会を取り巻く環境、状況が大きく変わるということの「型」が今日の箇所には表されているのです。それはイスラエル、ユダヤ人にとっては大きな苦しみ、患難の始まりを意味します。しかし、私たち教会にとっては携挙という喜びの瞬間なのです。天の父の家に用意された住まいに迎えられ、イエシュアといつともともにいる(ヨハネの福音書 14:1~3) という究極の喜びの始まりなのです。ですからイエシュアの花嫁である私たちにとっては、実はこの反キリストの出現は、災いではなくむしろ良きおとずれ、福音と言っても差し支えないものなのです。ですから私たちはこの反キリストに対して、世の終わりに対して心を騒がせる必要はありません。いやむしろそれを待望すべきなのです。

昨今のコロナ禍、ウイルスという目に見えない小さな存在によって、私たちのこれまでのあたりまえの生活は大きく変わりつつありますが、これもまた終わりの日の「型」と見ることができます。ぜひそのような視点を持って今の時を、今日という日を歩まれることをお勧めします。聖霊の助けがありますように。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

14:1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったのでしょうか。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えませます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。